

声を出して話をする事

コミュニケーションをとる、というときには多くの場合には、「ことば」でのコミュニケーションを想像する方が多いと思います。

医療従事者・看護師は患者さんと「はなし」をしてその患者さんの様々な情報を収集し、看護や治療につなげていきます。

その際の「自分の声の出し方」に注意をする必要があると考えています。

私は、このことを「言葉に心をのせて話す」という表現をして伝えるようにしています。

何か自分の気持ちにそぐわないことがあった時に、相手に「感情的に言ってしまった」という経験のある方もあると思います。つまり、自分が声を出して何か話をする際には、相手に自分の感情を伝えることになる、という事だと思います。

何気ないたった一言でさえ、自分の声の出し方ひとつで相手に伝わるものが変化する可能性があるのではないかと思います。

精神科では、患者さんが望まない医療を受け入れてもらわなくてはいけないという高いハードルがあることがあります。そんな時に、看護師の「心をのせた一言」が患者さんの行動に与える影響は計り知れないものがあることがあります。

精神科看護では、自分自身の存在そのものが大きな影響を与える要因となります。

入院を受け入れてもらえない患者さん・病識を持てないことで拒薬される患者さん、患者さん自身にとっては理不尽な状況に置かれ病気でもないのに薬を飲まなくてはいけない状況という事にはなるのですが、医療を受け入れてほしい医療従事者としては、「わかってほしい」気持ちでいっぱいです。

そんな「心」をのせて患者さんと話をするという事をいつも意識しています。

業務と言われることができることも必要かもしれません。ですが、精神科では、もっと大切にしていきたい看護の本質を考えていく事がもっと求められているのだと感じています。

「精神科看護」って、何をしたらいいの？ 何をする事？ など看護師に求められているものを考えて精神科のエキスパートの看護師を目指してみませんか。